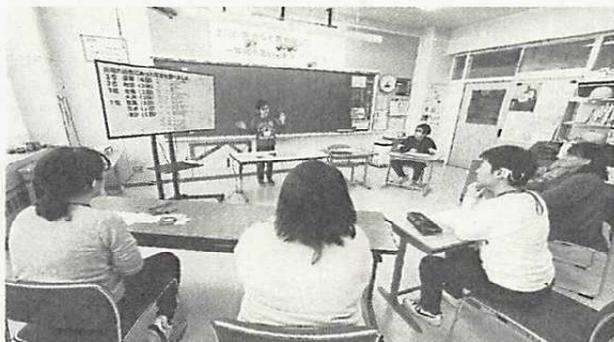


卒業生やボランティアと討論 地域防災の在り方探る 聴覚障がい者の視点から

函館盤



果的な対策を紹介した。

竹石湊さん（6年）は「どんな設備があるのかを知る」と題し、火災や台風、津波発生時に必要な家庭内の設備として、窓を補強する養生テープや家具の突っ張り棒等を紹介。函館市ハザードマップ

会長が、聞こえにくさから起こる災害時の困難を解らせた。阪神・淡路大震災や東日本大震災発生時、聴覚障がい者はテレビやファクスが使えず、携帯メールもつながらず、自分の置かれた状況が分からないという「情報がない恐怖」にさらされたことを振り返った。「災害や避難情報を文字で伝える防災無線メールや周囲の声かけがあれば、安心できる。周りの人との日常的な付き合いが大切」と伝えた。

授業を終え、児童たちは「緊張したが上手に話せた。函館大火時の話を聞いて驚いた」「聴覚障がい者協会の方の話には、自分の調べた以外の話があり勉強になった」などと感想を寄せた。

【函館発】函館聾学校（門真義弘校長）の6年生2人は11月下旬、同校卒業生やボランティア等5人と共に、テーマ「地域の防災」のもとパネルディスカッションを行った「写真」。

この日、児童は「パネライベ学習、発表シートの作成に取り組んだ。

児童たちは事前学習を踏まえ、防災に必要な視点や効果的な対策を発表。災害発生時に聴覚障がい者が置かれる困難や恐怖に理解を深め、対応を学んだ。

下田大翔さん（6年）は「過去の歴史から学ぶ」と題し、函館市内で昭和23年以降に起きた自然災害に焦点を当てた。豪雨が6回、地震が3回発生したことに加え、函館大火は江戸時代から30回あったことを説明。豪雨や地震における効

対応をテーマに事前の調べ学習、発表シートの作成に取り組んだ。

児童2人は共通して、聴覚障がい者が災害時に困ることを説明。「避難の放送が分からないので紙に書いて、手話を使ったりして伝える」「災害のニュースの音声が聞こえないので、字幕を付ける」「がれきの下にも気付けてもらえない時は、近くにあるものを投げたり、地面をたたいたりする」などの対応を示した。

国語科単元「パネライベ学習」をしよう」の授業で、児童は「災害時の

続いて、聴覚障がい者協